

序

本年度は、これまで最多の6名の1年生を迎え、2年生4名、3年生4名、4年生2名を加えて、総勢16名のゼミとなった。これまで、人が集まらないゼミとしての悩みの方が大きかったが、むしろこれからは、ゼミ室のキャパシティの問題などの方が課題となるような勢いである。

本年度も、いつもと同じように、前期は、文献購読を中心に、また、後期はゼミ誌作成を中心に行った。今年も金曜に会議や出張が入ることが多く、教員不在でのゼミが多くなる傾向は、今年も同じであった。

文献購読は、前期は主に吉川徹の『学歴分断社会』（ちくま新書、2009年）を、後期は荻谷剛彦の『大衆教育社会のゆくえ』（中公新書、1995年）をテキストとした。今年は教育社会学の購読が中心となった形である。

また、ゼミ誌は、例年と同様、ゼミ旅行の訪問先である網走市を主に取り上げている。今年も、例年同様、最後まで行き先と日程がなかなか決まらず、ゼミ旅行は11月20-21日までずれ込んだ。幸いに行きはほとんど雪の影響はなかったものの、帰りの峠道は雪道であった。来年こそは雪が降る前に旅行を敢行したいものである。また、網走は旭川から200km以上あり、車に乗っている時間がかなり長くなってしまったのも、今後の課題のように思われる。それほど遠くないところでレクリエーションが充実するような旅にしたい。その一方で、かなりの区間を高速に乗れたのは、非常に楽な感じがした。高速道路無料化万歳といったところであろうか。

私自身は、網走を訪れるのは初めてであったし、サロマ湖も初めてであった。特に、網走監獄の広さは想像もしていなかったし、もう少しゆっくり見学したかったくらいである。そういう意味では意義ある旅であったが、年々感じる衰えも感じる。特に酒が。網走のビールはとりあえず全て押さえたし、北見のオホーツクビールも軽く嗜んだものの、かつてであればもっと食欲に飲んでいただろう。年相応といえばそれまでだが、なんとなく寂しさを感じなくもない。

最後に不満を述べておこう。最近のゼミ運営に若干アクセントがないような気がする。例えば、以前は、清掃工場・日本製紙旭川工場・上兵村記念館の見学、駅周辺のフィールドワークなど、学校外での活動も行っていたし、大学主催の国際環境フォーラムに出展するためのポスター作成に向けた自主研究会なども行われたことがある。また、ゼミ室での焼肉パーティーなども、かつてはよく行っていたものである。しかし、そうした傾向が、こと新カリになってから失われているのは残念である。新たな形を模索することでも構わないが、座学中心になってしまっている今のゼミに、新しい潮流を付け加えていくことは必要である。ぜひ、そのあたりで学生の「奮起」に期待する。

角